今週の為替相場見通し（2018年6月18日）

総括表		先週の値動き				今週の予想レンジ		
		注	レンジ			終値		
米ドル	（円）		109.23	～	110.90	110.64	109.00 ～ 111.50	
ユーロ	（ドル）		1.1543	～	1.1853	1.1610	1.1300 ～ 1.1900	
（1ユーロ=）	（円）		127.72	～	130.35	128.46	126.00 ～ 131.00	
英ポンド	（ドル）		1.3212	～	1.3446	1.3279	1.3100 ～ 1.3400	
（1英ポンド=）	（円）	*	146.28	～	147.99	146.91	146.00 ～ 148.00	
豪ドル	（ドル）		0.7438	～	0.7623	0.7438	0.7300 ～ 0.7700	
（1豪ドル=）	（円）	*	82.27	～	84.16	82.35	80.50 ～ 84.50	

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　田家 裕介

⑴ 今週の予想レンジ：　109.00 ～ 111.50 円

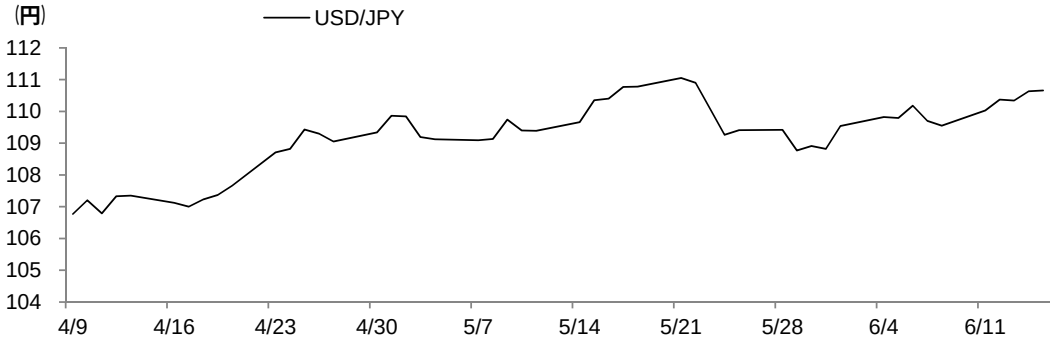
⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上昇する展開となった。週初11日、8～9日のG7首脳会議で米国と6か国の対立が鮮明になったことから週最安値109.23円を付ける場面も見られたが、日経平均株価が底堅く推移する中、ドル/円は110.00円付近まで上昇。12日、米朝首脳会談を前に期待感からドル/円は110.49円まで続伸。会談は友好的な雰囲気で行われたものの、合意文書には核放棄への具体的なプロセスの記載が無かったことから反落。しかし13日、米朝会談は物別れになる可能性もあった中、友好的な結果となったことが再度意識されたことでリスクオンの展開となり、ドル/円は110.72円まで反発。注目のFOMCでは事前の予想通り、政策金利の25bp引き上げを決定。声明文からは「金利は長期的に有効な水準を下回る」との文言が削除されたことやメンバーの政策金利見通し（ドットチャート）では2018年の利上げ回数の見通しが4回に引き上げられたことから発表直後はドル買いで反応し、ドル/円は110.85円まで続伸。しかしその後のパウエルFRB議長の会見が期待ほどタカ派なスタンスではなかったことや米中貿易政策への懸念が再燃したことから14日には109.92円まで下落。その後、ECB政策理事会で「マイナス金利は来年夏まで維持」とされたことからユーロ売りドル買いの流れとなり、ドル/円は一時110.70円まで反発。15日、日銀金融政策決定会合では予想通り金融政策は現状維持となるも、物価判断が下方修正されたことから週最高値110.90円をつけた。しかしその後は米中間の貿易摩擦への懸念が再燃したことで110.39円まで反落し、ドル円は110円台半ばで越週した。

今週のドル/円は上値重い展開を予想する。米朝首脳会談では非核化に向けた具体的なプロセスは明示されなかったことに加えて、会談後の両国の報道を見ると、合意文書への認識のズレがあるように見受けられる。ポンペオ米国務長官が主導する協議は難航することが予想され、完全かつ検証可能で不可逆的な非核化へのコミットを北朝鮮から引き出すことは容易ではないと予想。リスクオン一辺倒の流れにはなりにくいだろう。また、開催されたFOMCの声明文はタカ派な内容になったものの、その後のドル/円は上値を試す展開にはなっていない。米経済は好調であるものの、FRBによるテーパリング観測が早期に高まることでドル/円が大きく上昇する可能性は低いだろう。米中貿易戦争への懸念も意識されることで今週のドル/円は上値重い展開を予想する。今週のイベントは18日（月）にダドリーNY連銀総裁講演、19(火)に米5月住宅着工件数と建設許可件数、20日（水）に米5月中古住宅販売件数が予定されている。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（6/11～6/15）の値動き：　安値 109.23 円　高値 110.90 円　終値 110.64 円



（資料）ブルームバーグ

2．ユーロ

為替営業第二チーム　藤巻 龍太郎

⑴ 今週の予想レンジ：　1.1300　～ 1.1900　　126.00　～ 131.00　**円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

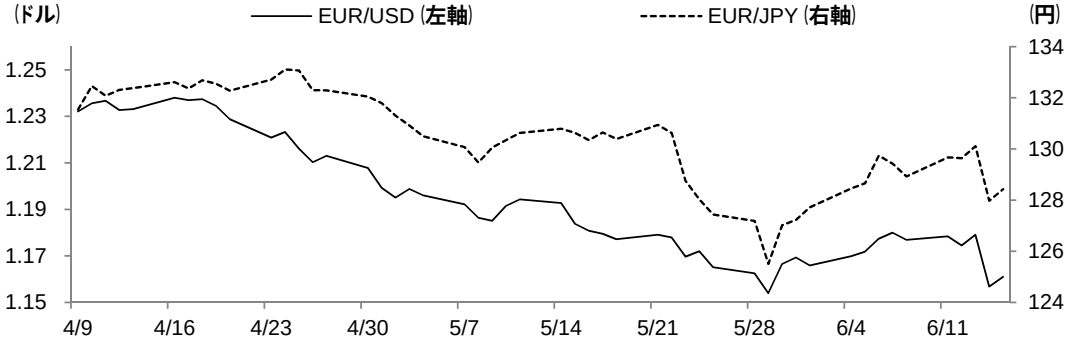
先週のユーロ/ドル相場はECB政策理事会後に急落した。週初11日に1.17台後半でオープンしたユーロ/ドルは、イタリアのトリア新経済財務相が新政権はユーロから離脱する意思はないと発言すると1.18台前半まで上昇。しかし、14日に開催されるECB政策理事会を控えて上値を追う動きは見られず1.17台後半まで反落。12日は1.17台前半まで続落した後、米5月消費者物価指数（CPI）の発表後に1.18台を回復したものの、パウエルFRB議長が全てのFOMC後に記者会見を開催することを検討と報じられ利上げペース加速の兆候かもしれないとの思惑からドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.17台前半まで下落した。13日は1.17台後半まで反発し、FOMC直後のドル全面高の展開に1.17台前半まで下落したがパウエル議長会見後は1.18台まで急反発する荒い値動きとなった。14日はECB政策理事会で「年末で資産の新規買い入れを停止」と発表され週高値となる1.1853をつけたが、マイナス金利は来年夏まで少なくとも維持と表明されるとユーロ売りの流れとなり、1.15台半ばまで急落した。15日については前日の流れを受け下落するも、その後は買い戻しが入り1.16台前半でクローズしている。

今週のユーロ相場はボラタイルな展開を想定するもリスクは下落方向か。先週はECB政策理事会において、資産購入プログラム(APP)の年内の終了と同時に、政策金利の2019年夏までの維持を発表した。リーマンショック後の景気をサポートし、そしてイタリア懸念な欧州危機時の国債の買い手を担って来たバランシート拡大政策の終了に伴うショックを緩和するためか、タカ派とハト派をミックスに発表してきた格好となった。足許の状況を考えると、軟調な指標が続く中、APPの終了をタカ派と捉えられユーロ高にはしたくはないので、うまくやったと言うしかないか。但し、このフォワードガイダンスの扱いは非常に鍵となる。欧州では、マイナス金利になったということでユーロを保有できない参加者が非常に多い。遂に利上げかと期待も高まっていた中での来年夏までの利上げなしは、ユーロを購入する参加者にとっては意外に大きなダメージとなるかもしれない。よって、リスクは下落サイドか。まずは、5月の安値である、1.1510を抜けるかがポイントとなるであろう。そしてそうなった場合のリスクはユーロ下落に伴いインフレが上がってきてしまうことかもしれない。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（6/11～6/15）の値動き：　（対ドル）安値 1.1543　高値 1.1853　終値 1.1610

（対円）安値 127.72　高値 130.35　終値 128.46



（資料）ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　芹澤 隆博

⑴ 今週の予想レンジ：　1.3100　～ 1.3400　　146.00　～ 148.00　円

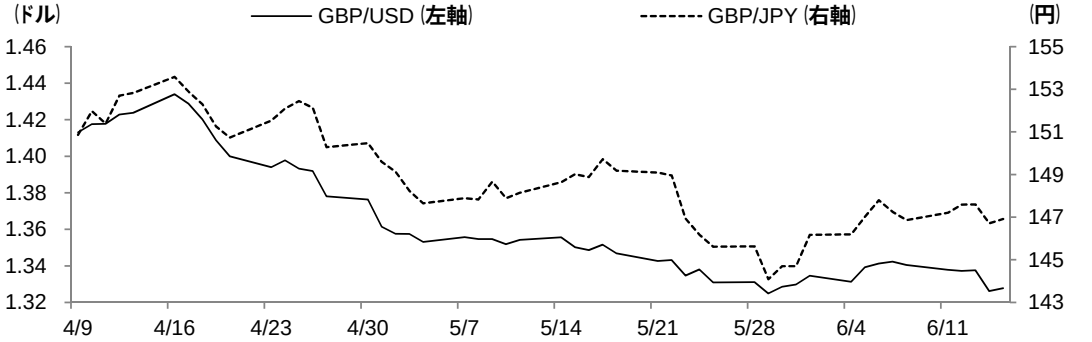
⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場はイベントに振らされる展開となった。週明け、英4月鉱工業生産、英4月製造業生産が予想を大幅に下回るとポンド/ドルは1.3440近辺から1.3350近辺まで下落した。火曜日の米朝会談は波乱なく終了し、また注目されていた英EU離脱修正法案の投票で議会に拒否権を与えるMeaningful Voteが否決されたことから修正案がソフトブレグジット寄りの内容となったことから、ポンド/ドルは1.33台後半で底堅く推移した。水曜日に発表された英5月CPIは予想通りの結果となり相場への影響は限定的。注目された米FOMC政策金利発表では予想通り25bpの利上げ。また今年の利上げ回数についても4回となったことを受けドル高の展開となり、ポンド/ドルは1.33台半ばから1.3308まで下落した。しかしその後に出た米政府が中国製品への関税を準備中との報道に再びドル安の流れにポンド/ドルも値を戻す展開となった。木曜日に発表されたECBではQEの年内終了が決定したものの、政策金利は少なくとも2019年夏までは現在の水準と表明。この今回導入されたフォワードガイダンスが想定以上のハト派的な内容となり、まずユーロ/ドルが下落を開始。それに呼応するように各通貨でドル買いの流れとなり、BBDXYも直近の高値を大幅に上抜けし、ポンド/ドル大幅に下落。1.3447の高値から1.3212の安値まで断続的に売られる展開となった。このようにポンド主因というよりはドルやユーロの要因で相場が大きく動く1週間となった。

今週の英ポンド相場は軟調な展開を予想する。注目された英EU離脱修正法案では、ソフトブレグジット寄りの内容となったものの、先行きの不透明感はぬぐえず引き続き不安定な状態は続くであろう。月末のEUサミットに向けたヘッドラインリスクにも注意が必要であると思われる。また、ECBのハト派姿勢に端を発した欧州通貨売りドル買いの流れは当面続くと思われる。その証左に、ポンド/ドルの通貨オプション市場におけるリスクリバーサルの値動きは、水準こそまだ低いもののポンド安警戒の方向に動いており、また1か月物のアット・ザ・マネー（ATM）の水準も底堅い動きをしていることから市場のダウンサイドへの警戒感は相応に高くなっているものと思われる。指標としては21日（水）にBOEの政策金利発表が控えている。据え置きが予想されており、大きな波乱はないと思われるが、ECBの決定を受けて慎重なスタンスとなるようなコメントが出てくるようであればポンド下押し要因となるであろう。テクニカル的には週足の一目均衡表の雲上限が1.32半ばに控えており、ここをクリアに下抜ければもう一段の下押しが期待できるものと思われる。また、先週末には米政府が中国への制裁対象のリストを発表しており、再び貿易戦争にかかわるリスクには注意が必要であろう。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（6/11～6/15）の値動き：　（対ドル）安値 1.3212　高値 1.3446　終値 1.3279
（対円）安値 146.28　高値 147.99　終値 146.91



（資料）ブルームバーグ

4．豪ドル

為替営業第二チーム　岡本 明生

⑴ 今週の予想レンジ：　0.7300　～ 0.7700　　80.50　～ 84.50　円

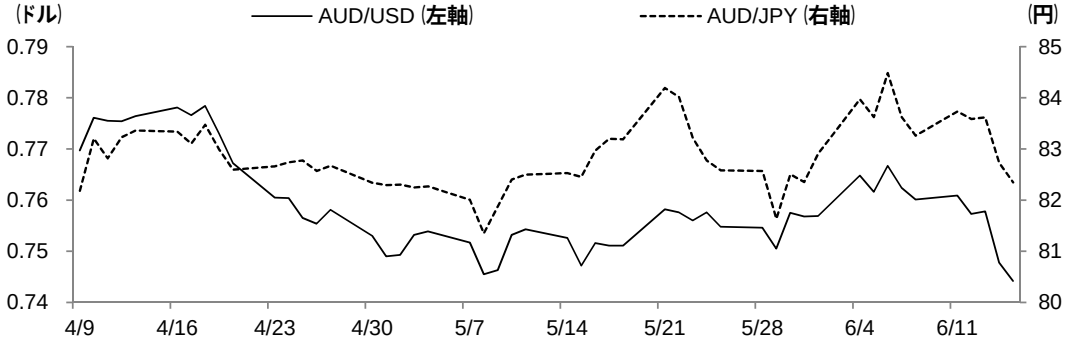
⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

11日はシドニー休場の中、今週に米朝首脳会談・FOMCなど重要なイベントを前に0.76半ばを挟んだ小動きな取引が続き0.7608近辺引け。12日の豪ドルは0.76前半でオープン、シンガポールで米朝首脳は文書署名に至ったが今後の協議に成果を託す形となり市場で大きな影響は見られず、豪ドルは0.75後半と0.76前半でのレンジでの商いが見られた。海外市場ではFOMCを翌日に控えて目立った動きはなく、予想通りの米インフレ率の結果を確認し0.75後半引け。13日の豪ドルは0.7575近辺でオープン、FOMCを控え様子見で0.75半ば～後半で膠着となった。FOMC発表直前は0.76近辺で取引されたが、今年の米金利引上げ予想が合計3回から4回へ引き上げられたことを受け米ドル買いが広まり安値0.7530まで下落した。しかし、ECB理事会を翌日に控え米ドル買いの勢い続かず、オープニング水準の0.7575近辺へ戻して取引を終えた。14日の豪ドルは0.75後半でオープン、強弱ミックスした豪州雇用統計は無視され、予想より弱い中国指標結果から豪ドルは0.75半ばでへ小緩んだ。海外市場での大きな材料は欧州中銀の来年夏まで緩和政策維持を失望しユーロ売り/米ドル買い、同時にその米ドル買いの流れが豪ドルを安値0.7475まで下落させ安値圏引けとなった。15日の豪ドルは0.74台後半でオープン。前日の流れを引継ぎ豪ドルはじり安の展開もイベント通過感から動意薄の展開。海外時間に入り発表された米国による対中制裁関税リスト詳細に対する警戒感から、豪ドルは一段と売りに押されて年初来安値を更新する0.7438レベル、対円では82.31レベルを割り込んで越週した。

今週の豪ドル相場は下値を探る展開を予想する。政治面では米朝首脳会談に大きな成果なくゲームチェンジャーとして相場の方向感を変える程の期待はできない一方で、FED・ECBの金融政策決定会合は両者のスタンスの違いが明確化されたため、ドル買いユーロ売りを招いたが、イベント通過感のある中今週もドル買いの流れが続きやすく、資源国通貨には売り圧力が継続しやすいと考えられる。豪中銀としては先週ロウ総裁が「次の金利変更は引下げではなく引上げの可能性」「幾分先と見受けられる」と発言したように金融政策の変更は当面先の予定で、中国の対米関税問題による不透明感も踏まえれば積極的な買いは控えられよう。今週24日（金）のOPEC総会にて減産措置継続が決定しコモディティ価格全般が一段と上を試すようであれば、年初来安値を更新した豪ドルにも買戻しが入りやすいと思われ、週後半にかけて相場が反転することも視野に入れたい。その場合は、一目均衡表の雲下限である0.75台半ばが意識されよう。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（6/11～6/15）の値動き：　（対ドル）安値 0.7438　高値 0.7623　終値 0.7438
（対円）安値 82.27　高値 84.16　終値 82.35



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。